

思い出すままに、そしてオセアニア関係マイクロフィルムコピー・コレクションの放出

中野和敬（鹿児島大学名誉教授）

小生も最近は人並みに年寄りになったなど実感しながら過ごす毎日である。研究大会に顔を出すと、近年では、日本オセアニア交流協会の北尾陽之介さんに次ぐ長老に祭りあげられ、懇親会で「かんばい！」と叫ぶ役を割り振られる年が時々ある。思い起こせば小生がオセアニア地域研究にいそむようになったのは、プロの研究者になるための修行を始めた当初からではなく、40歳の時、つまり、1981年からである。その頃すでに本学会の基礎はできあがっており、小生はそれに乗っかる形で1983年の暮れに当時学会の裏方の主軸として活動されていた大塚柳太郎氏の誘いに応じて入会した。ちなみに本学会研究大会の第1回は1984年3月30、31日の両日にわたり、開催された。けれども、小生がはじめて研究大会に参加したのは、その翌年の第2回大会であった。

小生は子供の時から世界地図を眺めるのが好きであった。子供時代は太平洋戦争の直後で、外貨事情の関係から、一般人は外国へは出かけられなかった。そんな時代に外国の地図を眺め、各々の土地の様子をわずかばかりの知識を基に空想するのが楽しかったが、高校で地理を勉強し、気候と植生の関連性をならうにつれ、興味の焦点はそこに集約するようになった。大学では理科系学科へ進めという両親の意向もあって植生の勉強のできる東京大学理学部の植物学課程へと進学した。気候と植生の関連性を勉強するうち、各植生におけるヒトの営みとの関連性も面白くなり、大学院では、植物生態学の研究室に入った。その門司正三教授は、業績面では植物生態学史上画期的と現在世界的にも基礎文献として高い評価を受けている論文を1953年にドイツ語で発表されたが¹⁾、学生指導に関しては幸いにも、許容量の非常に大きな先生で、学生の興味を抱いた分野はできるだけ受け入れるという方針で接してくれた。ただ、小生が高校時代以来興味を抱いていた分野は具体化する際なんとしても扱いにくく、大学院の博士課程で定められた期間では、まとまりそうもなかったから、学位取得のために、先生の目指す実験生態学的手法を用いる研究に従事した。

他方、先生の業績とのつながりから農学者との接触も多く、農業に関する知識が増すにつれ、ヒトのなりわいへの興味もますます深まった。その頃たまたま農業経済の大学院に農業地理学という科目のあることを知り、担当の逸見謙三先生の指導も受けさせてもらった。いわばうわ気をしたのであるが、門司先生はいやな顔をするより、むしろはっぱをかけるという具合であった。この逸見先生のおかげが小生のその後の学究生活において決定的な役割りを果たした。逸見先生は大変に博識で、ゼミの後、喫茶店へ学生を引き連れ、四方山話しのうちにさまざまな方面の知識を学生に伝えた。

逸見先生は小生のために、科学研究費の各個研究を申請してくれた。後から振り返ってみると、その時が我が生涯で小生が科学研究費の申請書の原稿を書いてお金がもらえた唯

一の機会となった。当然、正式の申請者はあくまでも逸見先生であった。このことは常識的には、驚くべきことであろう。本来制度的には何も関係のない学生のために研究費を取ってくれたのであるから。研究題目は、精確には覚えていないが、オーストラリア農業に関するものであった。そのころ乾燥地農業の代表としてオーストラリアになんとなく興味を抱いた。オーストラリアを選んだいきさつは、植物生態学研究室の助教授(当時の名称)がたまたまオーストラリアに2年近く滞在した後帰国してからあまり間もない時期であったから、オーストラリアの様子を聞く機会が多かったからかもしれない。ともかく科学研究費のうちの20万円程度を自由に使ってよかったから、オーストラリアおよびその周辺地域の農業に関する本を何冊か買った。その中に出版されたばかりの Roy A. Rappaport による *“Pigs for Ancestors”* があった。この本の小生に対する衝撃は大きかった。この本は周知のとおり文化現象を本来の生態学の知識を用いて物質面から説明しようというものであったけれども、小生が引きつけられたのは、その中に出てくる *Time and Motion Study* の手法を用いて労働各種の能率をカロリー表示で克明に推定したデータの表であった。

それとほぼ同じ頃、ゼミで逸見先生は、Ester Boserup の *“The Conditions of Agricultural Growth: the Economics of Agrarian Change under Population Pressure”* を取りあげたから、小生もそれを精読した。彼女のモデルに従えば、各種農業形態の中で、最も労働生産性の高いのは、焼き畑農業で、また、その焼き畑農業で括られる範疇内でも、その休閑期間が短くなるにつれ、労働生産性はさがるということになる。この結果と上述の *“Pigs for Ancestors”* から、焼き畑農業に深い関心を寄せるようになった。つまり、彼女の言うことが実際に正しいかどうかを科学的、定量的に検証してみようという気になったのである。結局この課題がその後の小生のライフ・ワークとなった。

焼き畑農業に関心寄せた以上、一度はその一部始終をつぶさに観察し、定量的な実地データを取ってきたいという望みは極く自然ななりゆきであろう。そこで、その機会をうかがっていたが、たまたま大学の掲示板で、タイ国政府の大学院マスター課程のフェローシップの募集を知り、応募したら、幸いにも受かった。このフェローシップたるや10ヶ月滞在が原則で、支給額は往復渡航費の保証なしで16,000バーツ(当時1バーツは15円)というもので、どこからかかなりの額を補給してもらわないと研究活動はおぼつかなかった。それでもなんとか両親から援助の約束をとりつけて1972年6月、博士論文審査の最終段階である面接試験の2日後にあわただしくバンコクへ旅立った。その時はじめて飛行機の国際便に乗った。当時の国際飛行運賃は大変割り高で、今では普通にあるような安い切符は日本国内では入手不可能で、ノーマル・フェアを支払わざるを得なかった。タイでは、農科大学を意味するカセサート大学に所属し、バンコクにいる限り学生寮で学生と同室で寝起きできた。カセサート大学では、サンガ・サバスリ教授が当時林学部長をされており、タイ北部での焼き畑研究にもたずさわっておられた。そのせいで焼き畑の研究をしたいという希望はすんなり受け入れてもらった。その点、幸運に恵まれていた。また、バンコクへ着いてから奨学金支給の窓口であるタイ国ユネスコ国内委員会に顔を出した際、

支給額が 20,000 バーツへ増額されたという幸運のおまけまで告げられた。

タイでの実際の研究活動はこの上なく順調であった。サンガ先生から、William R. Geddes 教授自からが陣頭に立って実地調査をされたタイ北部メト村で調査したらどうかとサジェストされたので、ともかくそこを 1972 年の 8 月に訪れてみた。そこは、モン（メオ）族とカレン族の集落が互いに 1km 程度しか離れていない地区で、複雑な事情が絡み合っているようではあったけれども、Geddes 先生とタイ人の助手が長く滞在した村であるから、外部者の滞在にはなれていて、最初の訪問時はモン族の村に 2 泊しただけでバンコクへ帰ったが、10 月に再び訪れた際には周辺の事情がもう少し詳しくわかり、アヘン・ケシ栽培で生計を立てていたモン族よりも、自給自足的生活を営んでいるカレン族の方を主に調査しようと直感的に決めた。この直感は後で考えると正解であったように思われる。ただ現実には、カレン族の方の村は、外来者の長期にわたる宿泊は難かしいようであったため、実際に泊まる家は、モン族の村にいる中国人のアヘン商人の家と決めた。ちなみに、Geddes 先生が著したメト村のモン族についての克明な調査結果は、小生の帰国後の 1976 年に Oxford University Press より立派な本にまとめられ、出版されている⁽²⁾。

小生が本当に欲しかったのは、前述のとおり、Boserup モデルの検証に寄与できる定量的データであったけれども、タイへ渡る際の表向きの研究テーマは自然生態学的な題目であったから、調査地では、自然およびヒト双方の生態学的データを採取した。それに関しては、理学系研究科に所属していたせいで、自然生態学の基礎知識も持ち合わせていた点が生きた。はじめのうちタイ語、ましてや北タイ方言がまったくわからなかったため、宿泊先の商人の子供がチェンマイの中国系小学校を 5 年まで通ったせいで中国語の普通話が話せたので、調査に際しての使用言語はそれを使うことにした。大学学部時代に好奇心から私塾で 2 年間勉強した中国語が生きたのである。この点も幸運であった。

以上のような具合で実地調査の準備が整い、1974 年 4 月までそれに従事した。それ以上の滞在は、小生の身分と研究活動を保証してくれたタイ国ユネスコ国内委員会の規定上不可能であった。現地調査期間中に、所期の定量的データと分析試料はいくつもの幸運に恵まれてなんとか概ね採取できた。帰国に際しては、出発前に逸見先生から、船旅の素晴らしさを聞かされていたため、それに習い、陸路でシンガポールまで行き、シンガポールから香港までと基隆から神戸までは船に乗った。双方とも 1 万トン以上の客船か貨客船であったから、あまり揺れることもなく、1 等船客として至極快適であった。この点、すぐ後で記す、南太平洋をさまよう千トン・クラスの漁業実習船での雑魚寝旅とは、雲泥の差であった。

タイから帰国した後も就職口はなかった。帰国の翌年には、理解を示してくれた門司先生も退官し、代替わりとなった。けれども、肩身のせまい思いをしながら、もとの研究室になんとか出入りさせてもらい、学位論文の公刊と、タイで採取した試料の分析および論文作成などの作業をほとんど無収入の身の上で続けた。アルバイトは日本大学の非常勤講師のほかはあまりしなかった上、研究室での義務はほとんどなかったから、研究には打ち

込めた。このような状況を教養学部時代相談に乗っていただいた西川治先生が心配してくれ、なんとか就職口を世話してくれた。おかげで 1980 年 4 月ようやく青山学院女子短期大学の助教授となり、生涯最初のちゃんとした給料がもらえた。その時、39 歳であった。また、その年にタイでのデータをまとめた第 2 報が京都大学東南アジア研究センター（当時の名称）発行の『東南アジア研究』に載った⁽³⁾。この論文には一部の方々が目撃して下さった。翌年の夏休みに突如関西地方から自宅へ電話がかかり、鹿児島大学に東南アジアをも対象とした地域研究を専らとする研究センターができ、新任の教授を縁故公募しているから、応募したらどうかと誘われた。そこでセンター長の中尾佐助先生が上京した折りに東京駅構内で面談した。

当時、東南アジアの田舎での 1 年以上にわたる“住み込み調査”の体験からしっかりした論文を発表した日本人はまだあまりいなかった上、そのような調査の経験者はすでに皆確固とした職務についていたのである。そこで、小生にお誘いがかかったという次第であった。中尾先生は理科系出身者によるヒトの生態をきっちりした数値で分析した上述の論文に惚れ込んでくれ、万難を排して採用に努めてくださった。新任教授の選定を主議題とした会議は午前から始まり、昼食休憩の上、午後 3 時頃までかかったと聞いている。その結果、1981 年 11 月 1 日付けで鹿児島大学教授に就任したが、新設の研究センターの正式名称は「南方海域研究センター」であり、公式にはオセアニアおよびその周辺の地域研究を旨とするとなっていた。東南アジアはまさにその周辺地域という位置づけであった。この研究センターの設立に際しては、もともとは東南アジア研究を目指したのに、文部省（当時の名称）からそれは京都大学との二重投資になるから絶対ダメと言われ、当初の目論見は一旦挫折した。ところが、オセアニアを主務とするなら認めてもよいというのが同省の意向であったから、発足できたのである。当時大学教官のかなりの方々が発展途上国を対象とする地域研究は植民地主義を助長するものと決めつけて嫌悪感を抱いており、鹿児島大学でもそのような主張の勢力が強かったため、研究センター設立へ向けての機運がまともにくかったとも聞いている。

鹿児島に着任してみてもびっくりしたのは、この研究センターはすでに 40 名程度の調査隊を組織済みであり、水産学部の漁業実習船を利用して 12 月 12 日に鹿児島を出航して 6 週間の予定でフィジーまで往復するプロジェクトができあがっており、予算も付いていると聞かされたことであった。専任教官として当然小生もそれに参加することになっていた。その時水産学部の使っていた外洋実習船 2 隻のうち、大きな方の“鹿児島丸（1300 トン）”が丁度代替わりで新造され、海外向けの言わば処女航海として研究センターのプロジェクトがたまたま当たっていたのである。その航海は出航後数日で大変なトラブルに見舞われた。台風と出会ったのである。グアムの気象予報を参考にした船長が台風の進路を読み違え、そのまま突っ切れば、逃げ切れたものを、一旦引返したために中心から千キロは離れてはいたものの、中心気圧も非常に低い大型台風のせいで、大波を食らう羽目になったのである。2～3 日にわたり、プロの船員の顔つきの変わる程の揺れ方であった。処女航海

であるから、船員の方も、船の特性をまだ十分にはつかめてはおらず、手探り状態であったから、その緊張感は大変なものであった。後で流れたある程度根拠のある噂によると、新船建造費のやりくりのせいで、その時“鹿児島丸”には船を安定させるためのスタビライザーがついていなかったらしい。引返したり、大波のために船のスピードが出なかったり、また、途中海底磁気調査のために大回りをしたせいもありで、フィジーのスヴァ港に付いたのが1981年の大晦日であった。最短距離をたどった順調な航海より、5日程度の遅れであった。

大変な思いをしてようやくフィジーへ着いたものの、大晦日到着で明るく日は元日、つまり、正月休みでこのプロジェクトのカウンターパートである南太平洋大学 (USP) との儀礼的行事の行なわれる日も遅れたため、日程が押され、ヴィティ・レヴ島とヴァヌア・レブ島を1週間足らずざっと見回ったところでまた出港となった。ほとんど何もできない日々を再び二週間船上で過ごし、鹿児島市の谷山へ帰港した。前に記したような大型船でのゆったりと英気を養う旅とは大いに異なり、船員の対処次第では命に関わる経験をもした。帰港行事も終え、鹿児島市の自宅へようやく帰ったものの、上陸後の最初の夜はなかなか眠れなかった。それだけ交感神経が興奮していたのである。

上記のような「オセアニア海域における水陸総合学術調査」は一応3ヶ年度毎年実施できるとの文部省からの予算面での内諾が得られていたから、翌年はフィジーとソロモン諸島、次の年はパプア・ニューギニアへ出かけた。パプア・ニューギニアでは、小生は信州大学から招いた隊員と富士山よりも高い所まで登ったけれども、高山病にはかからずに済んだ。調査隊の規模はいずれも10名程度の同行学生を含めて40名で、出港日から帰還日までの期間は42日が原則であった。こうした“遠征”を実施するための準備作業はまことに大変であった。予算獲得へ向けての申請書を提出するまでに、まずどこへ行くかを決め、それから隊員を学内公募し、ばあいによっては学外からの研究者も少数加え、どのような調査をするかの輪郭を作り、研究班を編制する必要があった。大学教官は皆がそれぞれの研究テーマを持っているから、その自主性は尊重しないとうまくいかない。それでも、表向きにはまとまった調査をしてきたという体裁を整えなくてはならないので、その辺の兼ね合いが難しい。予算申請と同時に、相手国から正式な調査許可を得る必要がある。少人数で短期間こっそり調査するのはまったく異なり、実際には現地調査期間は短かくとも、現地の新聞に必ず掲載されるような国立大学の船での堂々とした訪問であるから、ことは面倒であった。そんな具合であったから、正式ルートを通じて外務省にもプロジェクト文書を提出し、現地大使館に通じておく必要もあった。普通の旅行斡旋業者よりもはるかに煩雑な作業で調査のできる目鼻を付けた後、相手国のカウンターパートを探さなくては能率の良い調査はできない。一部の隊員は、自分でカウンターパートを探せたけれども、大半の隊員には、その世話までしてやらなくてはならなかった。そこで、研究センターの方から、出発前にひとり現地に乗り込み、かなり面密なアレンジを整えた。その事前乗り込みの旅費の工面も大変であった。どうしてこのような苦労をなめなくてはならなかったの

かは、この研究センターの学内でのプレゼンテーションを確立する必要があったからである。専任教員定員4名の小規模な組織に加え、すったもんだの末にその設立にこぎ着けた施設であったし、存続期間も文部省令で、7年と定められていたから、常に学内で目立っておく必要があったのである。さもないと、7年後に同様の研究センター存続のための学内環境を整えられない恐れがあった。また、文部省科学研究費を獲得すれば、何も何千万円もの金をかけて船で行かなくてもよいではないかという意見は当然あったのであるけれども、当時は採択のための条件も悪かった。研究センター設立の趣旨から、多分野の教員が参加できる研究題目が期待されていたという事情があったのであるが、現在とは異なり、参加人数が多く、しかも分野のまたがる学際的な研究題目では、そのプロジェクトの採択される見込みはほとんどないというのが実情であった。

以上のような負担をなんとかしようということから、最初の3ヶ年度をどうにかこなし、4年度めは休養を兼ねて頭を冷やす期間とし、予算申請を休むことにした。ところが、やはり、船で調査へ出かけるというロマンを求める声もあり、また、海での調査が主務の教員からの再開を望む声に押されて5年度めと6年度めは再び船を使った総花的総合調査を申請せざるを得なかった。その結果、2年度ともミクロネシアへ出かけることとし、1985年はポーンペイとチューク（トラック）、それに、海洋調査のため、ポーンペイからチュークへ行く途中赤道まで一旦下るというコースをたどった。この年は、10月30日からの34日がプロジェクト実施に当てられた。1986年はパラオとヤップへ行くことになり、11月7日～12月17日の40日間はプロジェクトに実際に当てられた。

以上のような研究センターの表向きのプロジェクトだけでは、隊員それぞれの事情にもよるけれども、個人的な学問的成果は得られにくかった。毎年調査報告書は英文で出版したものの、海域での調査を目的とする隊員と現地で帰国後の分析試料を得ればよいという方を除くかなりの隊員はこれだけでは業績を評価される論文の書ける程度までには至らなかった。小生のばあい、現地に長期にわたり“住み込み”、様々な生態学的な要因と関連させながら、住民の行動を定量的に調査するのを理想としていたから、なおさら成果が得にくかった。そこで、小生は、採用にあたって期待されていた東南アジア研究を実施するために、幸い京都大学霊長類研究所の川村俊蔵教授からお誘いがあったのを機に、それに乗り、1993年から3ヶ年度は、インドネシアの西スマトラ州でその前から実施されていた「スマトラ自然研究」プロジェクトに毎年参加した。担当した研究班は“西スマトラの自然保全”を標榜しており、小生がその班長となった。そこで、ようやく論文と呼べる成果が発表できたのである。当時のインドネシアは、外国人研究者に観光地以外の田舎をうろろろされるのをあまりこころよく思わない傾向があり、調査許可の取得と実際の調査実施では苦労が多く、このプロジェクトでも、いろいろな場面で陰鬱な思いを味わった。

そうこうしているうちに存続を保証されている7年の時限が目の前に迫り、事実上の存続へ向けての作業に没頭せざるを得なかった。当時時限付きの国立大学付置研究機関はどれもこの件で頭を悩ましていた。本来の研究より事務方を通じての文部省とのお役所なら

ではの折衝に精力を要したからである。対応を間違えると、実際、存続不可という結果となりかねなかった。まず、同じ名称の研究機関の存続は認められなかった。結局、実質上は、あまり変わらなくても、いかにも方向が大きく変わるという印象を与えるための作文が必要であった。形式上は新設機関であるから、最終決定権は大蔵省（当時の名称）主計局の担当官が握っていた。それも、政府当初予算案の通常内示には含まれず、追加折衝まで持ち越された。継続へ向けての作業は、期限の1年以上前に学内の合意を得ることから始まり、最終年度の当初より本格的に文部省との折衝が断続的に行なわれた。紆余曲折の結果、1987年暮れには、翌年度の政府当初予算案確定まで大いにやきもきしたが、1988年度よりの10年間、「南太平洋海域研究センター」という名称の大学付置研究センターの存続が文部省より認められた。実質上は前の「南方海域研究センター」から変わった点はあまりなかったが、研究対象地域をオセアニアに前よりは絞るという結果となった。

組織が官僚的には変わっても以前とはがらりと変わるようなアイデアは出てこず、研究センター全体の企画としては、また船で調査地まで出かけようということになった。但し、研究センター側による事前の具体的な調査手はずのアレンジはしないという条件をつけた。今度は、主に水産学部の船舶使用の運行ローテーションの都合から、「鹿児島丸」ではなく、もう一隻の外洋船で“鹿児島丸”より少し小さい“敬天丸（860トン）”の使用となったけれども、乗り込む方してみれば、両船の乗り心地にはほとんど差がなかった。船に弱い小生にしてみれば、できれば、ご免被りたかった。行き先は、はじめの3ヶ年度は続けて希望者の多いパプア・ニューギニアへ行こうということになった。最初の1989年は11月10日からの50日間がプロジェクト期間となった。現地寄港地は、ラエとポートモレスビーであった。1983年に同国へ出かけた時は、船の安全性を第一に考慮し、ラエからポートモレスビー間は大回りをし、4日を要したが、この年は“敬天丸”船員の勉強のおかげで、前より1日だけ短縮できた。

小生のばあい、このプロジェクトだけでは業績のあがらないと同僚教官はよく理解してくれていたから、個人的に“住み込み調査”のできるプロジェクトをオセアニア地域で実施することを許してくれた。そこで、改組以前に出かけた所で焼き畑農業が盛大に行なわれているのは、ソロモン諸島とパプア・ニューギニアであることがわかったから、どちらかへ行こうと決めたが、後者はすでに多くの研究者が手がけていたので、避けたかった。詳細な事情は忘れてしまったけれども、前者には、当時、「ドド・クリーク農業研究場」という機関のあることがわかっていたので、そこへ長期滞在許可と研究活動の便宜を図ってくれるよう手紙を書き、小生のタイでの調査の論文2篇を同封してみたら、返事がすぐ届き、幸いにも歓迎するとのことであった。後で、わかったことであるけれども、その研究場の若い職員が日本政府の援助企画の一環で半年間、鹿児島県立農業大学校での訓練コースに参加したから、鹿児島という地名はその上司のイギリス人にとってもなじみがあったのである。この点はまことに幸運であった。心からありがたいことに、そのイギリス人、Rodney J. Cheatle氏は非常によく努力してくれ、小生は、無給という点を除けば2年間ソ

ソロモン諸島の国家公務員と同等の資格が得られた。当時の同国は、国家機関の現場幹部は主にイギリスかオーストラリア人がプロジェクト資金をどこからか獲得して赴任していたから、上記のような事態がめずらしくなかったのである。精確な期日は忘れてしまったが、1988年暮れからの2年間はビザの点でうるさかった同国に、それなしでいつでも入国でき、また、何ヶ月であろうと滞在できた。例によって表向きは、焼き畑サイクルと土壌の物理化学的性質の変化の関係を調査するということであつたけれども、焼き畑民の生態も調べるというのが小生の真の狙いであつた。この点も、Cheatle氏は地理学を主に勉強した方であつたから、よく心得ていた。彼は、小生が土壌学者であると周りには触れ込んでいた。根っからの土壌学者が聞いたら、きっと怒るに違いない。なにしろ、土壌学はまったくの独学で、正規のコースを受講したことのない小生なのであるから。また、少しでもさらに幸いなことに、その年度は、福武書店(当時の名称)からこのプロジェクトに対し、100万円の資金が得られたから、渡航費に苦労はなかった。当時は、日本でソロモン諸島行きの往復切符を買うと全コース、ノーマル・フェアを支払わなければならなかったから、その結果、常にビジネス・クラスの乗客であつた。

当初、Cheatle氏も小生と共同研究をする意向であつたが、ソロモン諸島に着いてみると、彼は、そのための研究費の取得がうまくいかなかったため、小生と入れ違いで、噂に聞く鹿児島を実際に目にしてから帰国し、その後ケニアへ赴任した。こちらとしては、気兼ねなく研究計画が立てられ、それは、むしろ幸いであつた。ホニアラ到着前から、調査地域はソロモン諸島国では人口密度の最も高いマライタ島と Cheatle氏とも合意していたが、同国到着後は、どこに実際“住み込む”かの選定作業がまず必要であつた。現地語名付きでフロラに関する先行研究のあることから、クワラエ地区がよいとは決めていたけれども、土壌調査が比較的楽で、商品生産を主としていないという条件と、アクセスも考慮し、マライタ島の中心地、アウキから北北西14キロ、標高400mに位置するアイテア集落に目をつけた。この集落の住民との付き合いは、結局、1995年3月まで断続的に続いた。なお、調査集落選定のためにアウキに滞在中、当時オーストラリア国立大学教授であつた Roger M. Keesing氏と偶然出会い、昼食を共にした。彼は、何年も同国から入国禁止の処置を受けていた後であつたから、マライタ島の地を踏むのは久しぶりと語っていた。小生はまことに不勉強なことに、その時 Keesing 教授の業績を何も知らなかったから、なぜ彼が入国禁止の処置をうけたのか、理由は見当もつかなかった。その後、何年も経たないうちに、同教授は急逝された。

その後、1990年、ソロモン諸島国家公務員に準ずる資格が失効する直前の10月から2回目の現地調査に赴いた。丁度その頃は研究センターのプロジェクトのニューギニア行きと時期が重なっていたけれども、同僚教官の了解が得られてマライタ島でのインテンシヴな調査の方に従事できた。その時の研究費捻出の工面はどうであつたかはすでにう覚えであるが、「南太平洋海域研究センター」発足後少し経ってから専任教官の海外出張費が自動的に毎年認められるようになったことで、その年は小生がそれを全額使用したと記

憶している。その後、1993年と1995年にも出かけた。計4回の現地調査の際、必ずアウキ近郊のアイテア集落での調査は行なった。それでも取得データは十分とはいえず、続けて補強調査を実施したかったのであるけれども、まことに残念ながら1997年からの例の“Ethnic Tension”で、実施できなかった。

1991年はまたパプア・ニューギニアへ船で出かけた。この年はラエとウエワクに寄港した。この年の出港から帰港までの期間は36日であった。この頃、週休2日制の完全実施のせいで、船の年間稼働可能総日数が以前より減り、この日数が我々に振り向けられ得る最大限となったから、ポートモレスビーまで行くのは無理であった。

船を使ったプロジェクトは、一旦休んだが、1994年から再開した。実は、1993年も予算申請をしたのであるが、その年は大阪大学附属病院移転に伴う費用がかさみ、省全体に他の事業へ支出する余裕がなく、我々への予算はおりなかった。その時たまたまセンター長の任にあったので、調査許可申請を取り下げのお詫びのために上京し、許可申請先のミクロネシア連邦大使と面談した。大使はまことに丁寧なことに、その面談に1時間も時間を割いてくれた。上述の事情により、ポリネシアは言うまでもなく、メラネシア行きも無理であったから、行き先をミクロネシアに絞らざるを得なかったのである。1994年度はポーンペイへ出かけたが、この年は調査許可が出港日までにはおらず、発給される見込みは十分あったものの、やきもきした。この時はすぐ南下すると、台風に遭遇する恐れも予測されたが、それ以外の理由で船員が船酔いをする程の大荒れで、鹿児島港出航後一旦伊豆大島の波浮港とか館山沖に避難せざるを得ず、しばらくは南へ向かえなかった。その待避中に調査許可がおりたという連絡が船に届き、ほっとした。以上のトラブルにより、出港してから、ポーンペイへ着くまでの日数が16日間もかかった。順調ならば、8日間で着くはずなのに。現地に着くまで手間取った分、プロジェクト総日数は30日間前後と決まっていたから、当然陸上での調査期間が短縮されるという結果になった。続いて1995年はパラオへ出かけた。出港から帰港までの総日数は29日間であった。

1996年は一旦オセアニア以外へ比較研究のために出かけようということになり、フィリピンのパラワン島へ行こうと計画を立てたものの、その頃フィリピン政府は調査許可の取得規則を変更し、取得手続きが煩雑となり、出港日までに間に合わず、すぐには取得の見込みもないということで執行中止となった。1997年はいよいよ存続のための文部科学省との折衝の年で、実質的な研究活動は阻害された。今度は地域研究機関という性格をいくらか弱め、それまでの実績の上に、島嶼研究にも力を向けようという方針を打ち出した。折りから、島嶼学なる分野を確立しようという動きが一部にあったのに、我々はその動きをあまり知らなかった。設立の許可がおりた後、沖縄で開催された国際島嶼学会の資料が小生の書棚にあったことを思い出し、この動きも利用すればよかったなどと語り合った。例によって大分苦労したが、その甲斐あって何とか「多島圏研究センター」なるものが認められた。

「多島圏研究センター」になってもあい変わらず、船でミクロネシアへでかけた。1999

年はヤップへ、2000年は、一度環礁へ行こうということで、ヤップ州のウルティ環礁へ出かけた。水産学部の組織改革のために、“敬天丸”が廃船となるせいで、船でオセアニアの島々へ出かけるプロジェクトの最後となったこの機会に、3泊民泊ができ、環礁に生活する人々の生活の厳しさを垣間見た思いで印象深かった。

小生は、4年間その研究センターに勤め、丁度船で出かけるプロジェクトが完全に終わった段階で、かねてより自分で決めてあった予定どおり、定年退官まで5年を余し、2002年4月3日、つまり61歳の誕生日の前日付けで職を辞した。その後は、文献の読破量の少なさを常々痛感していたから、文献の収集と読み込みに精力を傾注した。

在職中は公務に時間を取られ、また、フィールド・ワークに精力を傾けていたから、文献に接する時間が思うようには取れなかった。けれども、退官後に思う存分文献を読み込もうと在職中から、興味を持ってそうな文献の収集には心がけていた。外国で資料のコピーを取り、それを持ち帰るには、持ち運びの負担を考えなくてはならない。小生のでかけた地域では、当時は現在とは異なり、コピー機械がまだあまり普及していなかった。たとえばソロモン諸島のドド・クリーク農業研究場では、1995年でさえ、コピー機械は場長が直接管理しており、コピーを取るにはいちいち場長の許可が必要であった。また、タイのチェンマイでも、小生がいた1970年代前半には国の出先機関であった Tribal Research Centre の図書室でさえ、コピー機械は置いてなかった。そこで小生の取った方策は、マイクロフィルムコピーを取るという手段であった。文献のマイクロフィルム化は、1960年頃アサヒペンタックスという一眼レフカメラが売り出されてから、普通の人でも自由に、気軽に文書が撮れるようになった。小生が学生であった1960年代、デジタル技術がまだ発達していなかったから、図書館幹部の多数がこれからはマイクロフィルム化の時代になると真剣に考えていた。確かに一部では、その通りとなり、現在でも、古い新聞はほとんどマイクロフィルムコピーとして所蔵されている。外国でコピーを取り、日本へ持ち帰るには、この方策は適していた。そこで、小生もタイ滞在中から、マイクロフィルムコピーで文献を撮影することに努めたのである。例えば、船でオセアニアの島々へ出かけるプロジェクトの最中、官庁の事務所から1日だけ資料を借り、翌朝、船の甲板で撮影したということもある。また、退官後、9ヶ月間オーストラリア国立大学太平洋・アジア研究校（当時の名称）でひとつの研究室の半分を占拠させてもらった間、同大学にあるか、または同大学図書館が取り寄せてくれた資料の撮影に大部分の時間に費やした。幸い、同校の歴史文献資料センターでは、デジタル技術よりもマイクロフィルムの方が信頼性と保存性、それに使用手順の融通性に優れている点の評価し、基本資料はマイクロフィルムで保存するという方針を打ち出しており、小生の個人的な意図に十分協力してくれた。こうした努力の甲斐あって、小生は、立派な書庫を個人的には必要とせず、書斎のために家を建てようという気も起こらなかった。個人所蔵文献資料の大半は家庭用冷蔵庫1個半に収まっている。

以上のように大学卒業後50余年、勉強を続けてきたが、45年間追いかけてきた Ester Boserup モデルの科学的検証という課題に対し、自分では曲がりなりにも一定の成果が得

られたと納得のいく気分がするし、この記事の冒頭に記したように、老いを感じるようになったから、これからはまったりと余生を送ろうという思いが強い。そこで、日本オセアニア学会会員の方々に少しでもお役に立ちたいという趣旨で、小生所蔵のオセアニア関係のマイクロフィルムコピーをご希望の方へお譲りしたい。具体的には、以下の要領で入手希望者にお送りする。

今回放出分はすべて 35mm ロール・フィルムで、日本国内では閲覧困難な文献も少なからず含まれます。入手ご希望の方は下記要領で資料提供者、中野和敬にその旨お知らせください。

1. マイクロフィルムコピーの譲渡そのものは無料です。但し、郵送料は郵便切手にて現物受領後にお支払ください。
2. 別記リストの中から、入手ご希望の資料の整理番号を提供者へお知らせください。その際、同一資料に複数の方が入手希望をされるばあいは、希望の E-mail の最先着者へお送りします。入手御希望の意思表示は、wakei.n@blue.plala.or.jp まで。

註

- (1) Monsi, Masami und Toshiro Saeki, 1953, Über den Lichtfaktor in den Pflanzengesellschaften und seine Bedeutung für die Stoffproduktion. *Japanese Journal of Botany* 14: 22-52.
- (2) Geddes, William R., 1976, *Migrants of the Mountains: The Cultural Ecology of the Blue Miao (Hmong Njua) of Thailand*, Oxford University Press.
- (3) Nakano, Kazutaka, 1980, An Ecological View of a Subsistence Economy Based Mainly on the Production of Rice in Swiddens and in Irrigated Fields in a Hilly Region of Northern Thailand. 『東南アジア研究』 18(1): 40-67.

別表：今回マイクロフィルムコピーが提供されるオセアニア関係資料のリスト

整理番号	著者または編者	原書籍または文書表題	出版元	出版年	付記
1004	Bourke, R. Michael	Management of Fallow Species Composition with Tree Planting in Papua New Guinea	The Australian National Univ (ANU)	1997	Resource Management in Asia-Pacific Working Paper 1997/5
1006	Carmen, Kathy	A Study in Subsistence Agriculture	PNG Department of Primary Industry	1980	
1013	Manner, Harley I.	The Effects of Shifting Cultivation and Fire on Vegetation and Soils in the Montane Tropics of New Guinea	Univ. of Hawaii	1976	Doctoral dissertation
1132	Taylor, Rod	The State versus Custom - Regulating Papua New Guinea's Timber Industry	ANU	1997	Resource Management in Asia-Pacific Working Paper 1997/9
1210	Benediktsson, Karl	Harvesting Development: the Construction of Fresh Food Markets in Papua New Guinea	The Univ. of Michigan Press	2002	
1212	Bourke, R.M. et al. (eds.)	Food Security for Papua New Guinea	ACIAR	2001	Proceedings of the Papua New Guinea Food and Nutrition 2000 Conference, PNG Univ. of Technology, Lae 26-30 June 2000. 部分撮影
1230	Hirst, Jane et al. (eds.)	Smallscale Agriculture	ANU	1988	
1231	Hviding, E. & Bayliss-Smith, T.	Islands of Rainforests: Agroforestry, Logging and Eco-tourism in Solomon Islands	Ashgate	2000	コントラストを変えて全編完全重複撮影
1305	Brookfield, Harold & Humphries, G.S.	Mission to the Pacifiland Network of IBSRAM: General Report on Vanuatu, Fiji and Western Samoa	ANU	1992	
1313	Fox, James (ed.)	The Heritage of Traditional Agriculture among the Western Austronesians	ANU	1992	

1320	Heider, Karl Gustav	The Dugun Dani: a Papuan Culture in the Highlands of West New Guinea	Aldine Pub. Co.	1970	写真のあるページはISO100 フィルムで別々に 追加撮影
1366	Hipsley, Eben H. & Kirk, Nancy E.	Studies of Dietary Intake and the Expenditure of Energy by New Guineans	South Pacific Commission	1965	
1369	Lea, David A.M.	Abelam Land and Sustenance: Swidden Horticulture in an Area of High Population Density, Maprik, Papua New Guinea	ANU	1964	Doctoral dissertation
1601	Allen, Bryant J. (ed.)	Agricultural and Nutritional Studies of the Nembi Plateau, Southern Highlands	The Univ. of PNG 他	1984	Pp. 140 & 141 は欠 (撮り忘れ), pp. 158 & 159 は上半分欠 (カメラ不調のため)
1605	Bourke, R.M. & Kasavan, V. (eds.)	Proceedings of the Second Papua New Guinea Food Crops Conference	Dept. of Primary Industry of PNG	1982	Part 1, 2 & 3 (3 Volumes). Conference の開 催日: 1980年7月14~18日. 開催場所: The Goroka Teachers' College. Neopann 撮 影を含む
1606	Levett, Malcolm P. et al. (eds.)	Proceedings of the First Papua New Guinea Food Crops Conference	The Univ. of PNG Press 他	1992	Conference の開催日: 1983年10月31日~ 11月4日. 開催場所: The National Sports Inst., Goroka
1607	Modjeska, Charles J. Nicholas	Production among the Duna: Aspects of Horticultural Intensification in Central New Guinea	ANU	1977	Doctoral Dissertation. Pp. 341 & 342 撮影 原本(欠)
1608	Powell, Jocelin with Harrison, Simon	Haiyapugwa: Aspects of huli Subsistence and Swamp Cultivation	The Univ. of PNG 他	1982	Occasional Paper No. 1 (New Series), Dept of Geography, the Univ. of P.N.G.
1609	Shaw, Barry	Agriculture in the Papua New Guinea Economy	Inst. of National Affairs Inc.	1985	
1610	Wilson, K. & Bourke, R.M. (eds.)	1975 Papua New Guinea Food Crops Conference Proceedings	Dept. of Primary Industry of PNG	1976	
1611	Wood, A.W.	The Stability and Permanence of Huli Agriculture	The Univ. of PNG 他	1985	Occasional Paper No. 5 (New Series), Dept. of Geography, the Univ. of P.N.G. Neopan

1717	Weightman, B.	Agriculture in Vanuatu: Historical Review	British Friends of Vanuatu	1989	撮影を含む 写真ページは、Neopan film 撮影もあり。
2001	Anonymous	Fiji's Eighth Developmental Plan 1981-1985	Central Planning Office of Fijian Gov.	1980	Vols. 1 & 2 を合冊撮影
2002	同上	A Situation Analysis of Women and Children in the Solomon Islands	UNICEFF & the Government of Solomon Islands	1993	
2003	同上	The Solomon Islands: an Intorductory Economic Report (Report No. 2553-SOL)	World Bank	1979	Document of the World Bank for official use only. 最終巻フィルムは補充撮影: p. 117 よりは逆向きの配列
2004	同上	Solomon Islands: Review of Agricultural Programs (Report No. 6358a-SOL)	同上	1986	
2005	同上	Annual Report 1991	Central Bank of Solomon Islands	1992	
2006	同上	Solomon Islands: Report on the Census of Population 1986	Statistics Office of Solomon Islands	n. d.	Report 2B: Data Analysis. 正副の重複撮影であるが、副はほとんど読めない。
2007	同上	Final Ddraft of 1st National Development Plan (1987-1991) of Republic of Palau	Office of Planning & Statistics, the Gov. of Palau	1986	
2008	同上	Republic of Palau Agricultural Census 1994: Preliminary Tabulations	Min. of Resources & Development, the Gov. of Palau	1994	
2009	同上	South Pacific Economic and Social Statistics	AAID	1995	AAID とは Australian Agency for International Development のアクロニム
2010	同上	Australia's Overseas Aid Program 1996-97	Australian Gov. Publishing Service	1996	

2011	同上	Education and Training in Australia's Aid Program	AAID	1996	
2012	同上	Economic Situation Report	EMPAT for FSM Gov.	1996	EMPAT とは The Economic Management Policy Advisory Team のアタクロニム、Occasional Paper No. 6
2013	同上	The FSM Economy: 1996 Economic Report	Asian Developmental Bank	1997	
2014	同上	Proposed Agricultural Policies of the FSM to Increase the Contribution of Agriculture to the FSM Economy	不明	1998	
2015	Bamman, Heiko & Wey, Hans-Willi	The Cultivation of Taro in the Palau Islands (Micronesia): a Survey of Traditional and Recent Cultivation Practices	Palau Community Action Agency	1991	Mimeograph
2016	Barrau, Jacques	Subsistence Agriculture in Melanesia	Bernice P. Bishop Museum	1958	Bernice P. Bishop Museum Bulletin 219
2017	同上	Subsistence Agriculture in Polynesia and Micronesia	同上	1961	Bernice P. Bishop Museum Bulletin 223
2018	Barth, Fredrik	Cosmologies in the Making: a Generative Approach to Cultural Variation in Inner New Guinea	Cambridge Univ. Press	1987	Cambridge Studies in Social Anthropology 64
2019	Bathgate, M.A.	West Guadalcanal Report: a Study of Economic Change and Development in the Indigenous Sector, West Guadalcanal, British Solomon ...	Victoria Univ. of Wellington	1973	
2020	同上	The Structure of Rural Supply to the Honiara Market in the Solomon Islands	ANU	1978	Occasional Paper No. 11, Development Studies Center, ANU. ANU とは The Australian National Univ. のアタクロニム、
2021	Bayliss-Smith, T.	Ontong Java Atoll: Population Economy and Society, 1973—1986	The Univ. of New South Wales	1986	Occasional paper No. 9 of Smallholder Project

2022	Belshaw, Cyril S.	Changing Melanesia: Social Economics of Culture Contact	Greenwood Press	1976	原本は覆刻版、初版原本は Oxford Univ. Press による 1954 年の出版
2023	Ben, Waita et al.	Land in Solomon Island	USP & Min. of Agric. & Lands, Solomon Islands	1979	USP とは The Univ. of South Pacific のアクロニム
2024	Bicker, Alan et al. (eds)	Investigating Local Knowledge: New Directions, New Approaches	Ashgate	2004	未撮影ページを含む
2025	Brookfield, Harold (ed.)	The Pacific in Transition: Geographical Perspectives on Adaptation and Change	ANU Press & Edward Arnold	1973	
2026	Brookfield, H.C. (ed.)	Population-environment Relations in Tropical Islands: the Case of Eastern Fiji	UNESCO	1980	MAB Technical Notes 13
2027	Brookfield, H.C. et al. (ed.)	Taveuni: Land, Population and Production	同上	1978	The UNESCO/UNFPA Population and Environment Project in the Eastern Islands of Fiji: Island Report No. 3
2028	Brookfield, Harold & Brown, Paula	Struggle for Land: Agriculture and Group Territories among the Chimbu of the New Guinea Highlands	Oxford Univ. Press	1963	
2029	Burt, Ben & Clerk, Christian (eds)	Environment and Development in the Pacific Islands	ANU & The Univ. of PNG	1997	未撮影ページを含む
2030	Carroll, V (ed.)	Pacific Atoll Populations	The Univ. Press of Hawaii	1975	Papers of a Conference Sponsored by the East-West Population Institute, held Dec. 27-30, 1972 at the East-West Center: Pp. 458-524 は、重複撮影
2031	Chazine, J.M.	Tradition and Development - The Tuamotus: a Special Case Newsletter of the Society for Pacific Studies	South Pac. Commission	1989	1990 の South Pacific Commission の Paper No. 21 の付録 英訳版

2032	Christiansen, S.	Subsistence on Bellona Island (Mungiki): a Study of the Cultural Ecology of a Polynesian Outlier in the British Solomon Islands Protectorate	The National Museum of Denmark	1975	複式印刷 (大部分) 付き
2033	Clark, S.	Estimate of Non-market Production in the Solomon Islands	Statistics Office of Solomon Islands	1985	National Account: Discussion Document No. 1. Mimeograph
2034	Clarke, W.C.	Place and People: an Ecology of a New Guinea Community	Univ. of California Press	1971	
2035	Connell, John	Taim Bilong Mani: the Evolution of Agriculture in a Solomon Islands Society	ANU	1978	Development Studies Centre Monograph No. 12, ANU (Series editor: Shand, R.T). Pp. 79~80 は撮影原本が乱丁のため、注意！
2036	Conroy, J.D.	Essays on the Development Experience in Papua New Guinea	Inst. of Applied Social & Economic Res., PNG	1982	途中プリントのずれているところがあるが、その部分は末尾にプリント修正済みの補充撮影分を添付
2037	Dornstreich, Mark David	An Ecological Study of Gadio Enga (New Guinea) Subsistence	Colombia Univ.	1974	Doctoral dissertation
2038	Fallon, John	The Vanuatu Economy: Creating Conditions for Sustained and Broad Based Development	AIDAB	1994	International Development of Issues No. 32 by Australian International Development Assistance Bureau (AIDAB)
2039	Fallon, John & King, Tim	The economy of Fiji: Supporting Private Investment	AAID	1995	International Development of Issues No. 40 by Australian Agency for International Development
2040	Firth, Raymond	History and Tradition of Tikopia	The Polynesian Society (Inc.)	1961	Memoir No. 33
2041	Fleming, S. with Tukuafu, M.	Women's Work and Development in Tonga	The Univ. of New South Wales	1986	Occasional Paper No. 10 of Smallholder Project
2042	Fosberg, F.R. (ed.)	Man's Place in the Island Ecosystem: a Symposium	Bernice P. Bishop Museum Press	1965	正副2本のフィルムあり。副刊はp.206までの不完全撮影。

2043	Frazer, I.L.	North Malaita Report: a Study of Socio-economic Change in North-West Malaita	Victoria Univ. of Wellington	1973	
2044	Frazer, Ian	Growth and Change in Village Agriculture: Manakwai, North Malaita	The Univ. of New South Wales	1987	Occasional Paper No. 11 of Smallholder Project
2045	Goldman, Barry	Yap State Marine Resources and Coastal Management Plan	Yap State Gov., FSM	1994	
2046	Hancock, Ian	Food Production Systems in Solomon Islands: Characteristics and Potential for Development	USP	1987	Paper presented at the CTAVIRETA Technical Meeting on Appropriate Food Production Systems around Rural Homesteads, USP, on 2 to 5 March 1987
2047	Hardaker, J.B. & Verspax, H.M.H.	Guide to the Databases of the South Pacific Smallholder Project, Solomon Islands	The Univ. of New South Wales	1988	Research Note No. 5 of Smallholder Project
2048	Hawkins, E.K. et al.	The Solomon Islands: an Introductory Economic Report	World Bank	1980	
2049	Heath, Ian C.	Land Policy in Solomon Islands	La Trobe Univ.	1979	
2050	Hiatt, L.R. & Fayawardena, C (ed.)	Anthropology in Oceania: Essays Presented to Ian Hogbin	Angus & Robertson	1971	
2051	Hogbin, H. Ian	Experiments in Civilization: the Effects of European Culture on a Native Community of the Solomon Islands	Routledge & Kegan Paul	1969	覆刻版、初版は 1939
2052	Ivens, W.G.	Melanesians of the South-east Solomon Islands	Benjamin Blom	1972	覆刻版、初版は 1927
2053	Jones, S. et al.	Smallholder Agriculture in Solomon Islands	The Univ. of New South Wales	1988	The Project Report of Smallholder Project
2054	Kelly, Raymond C.	Etoro Social Structure: a Study in Structural Contradiction	The Univ. of Michigan Press	1974	撮影原本は 1980 年版の paperback 版
2055	King, Tim et al.	The Economy of Papua New Guinea: 1996 Report	AAID	1996	International Development Issues No. 46 by AAID

2056	Krämer, Augustin	Palau 3. Teilband: Ergebnisse der Südsee – Expedition 1910-1908: II. Ethnographie: B. Mikronesien. Band 3	L. Friederichsen & Co.	1926	
2057	Künzel, W.	Agroforestry in Tonga: Traditional Source for Development of Sustainable Farming Systems	The Univ. of New South Wales	1989	The Occasional Paper No. 12 of Smallholder Project
2058	Lambert, Michel (ed.)	Taro Cultivation in the South Pacific	South Pac. Commission	1982	SPS Handbook No. 22
2059	Lauder, J.	The Nature and Causes of Food Problems in Solomon Islands	Univ. of Oxford	1988	Master thesis
2060	May, R.J. & Nelson, Hank (eds.)	Melanesia: beyond Diversity	ANU	1982	Vo. 1, p 324 まで; Vol. 2, p. 690 まで
2061	McCutchen, Mary	Reading the Taro Cards: Explaining Agricultural Change in Palau	Gordon & Breach Science Publishers	1985	Food Energy in Tropical Ecosystems (ed. by Cattle, D.J. & Schwerin, K.H.) という書籍の Chapter 8. なお、この本は"Food and Nutrition in History and Anthropology" Series の No. 4
2062	McGee, T.G.	Food Dependency in the Pacific: a Preliminary Statement	ANU	1975	Development Studies Centre (of ANU) Working Paper, No. 2
2063	McGee, T.G. et al.	Food Distribution in the New Hebrides	ANU	1980	Development Studies Centre (of ANU) Monograph No. 25
2064	McGregor, M.	Fisheries Development Project: Asian Development Bank Loan 1257	FSM Government	1998	
2065	McKinnon, John M.	Mbilua Report: a Study of Rural Change and Development in Vella Lavella, Western District, British Solomon Islands Protectorate	Victoria Univ. of Wellington	1973	

2066	McKnight, Robert K. & Adalbert, Obak	Taro Cultivation in Palau District	Trust Territory of the Pacific Islands, Guam	1960	Anthropological Working Paper No. 6: Taro Cultivation Practices and Beliefs Part I, the Western Carolines. Mimeograph. 本来は p. 47 までであるが、撮影は p. 42 まで
2067	Miles, Joel E. et al.	Background and Situation Assessment of Land Resources (Agricultural) Development in Palau	不明	1994	For the Palau Master Development Plan. Mimeograph
2068	Mitchell II, D.D.	Land and Agriculture in Nagovisi, Papua New Guinea	Inst. of Applied Social & Economic Res., PNG	1976	Monograph 3 of Insititute of Applied Social and Economic Research, PNG
2069	Moore, C.	Kanaka: a History of Melanesian MacKay	Inst. of PNG Studies & Univ. of PNG	1985	
2070	Morauta, L. et al. (eds.)	Traditional Conservation in Papua New Guinea: Implications for Today	Inst. of Applied Social & Economic Res., PNG	1982	Monograph 16 of the Inst. Proceedings of a Conference organized by the Office of Environment and Conservation & the Inst., 27-31 October 1980
2071	Morauta, L.	Left behind in the Village: Economic and Social Conditions in an Area of High Outmigration	同上	1984	Monograph 25 of the Inst.
2072	Oliver, Douglas L.	Solomon Island Society: Kinship and Leadership among the Siuai of Bougainville	Harvard Univ. Press	1955	写真ページのみ ISO 100 のネガフィルムに別に撮影、それは Text の末尾につなげられている
2073	Osborne, Douglas	The Archaeology of the Palau Islands: an Intensive Survey	Berunice P. Bishop Museum	1966	Bernice P. Bishop Museum Bulletin 230. 全巻撮影のと p. 301 までの2本あり、後者の方が読みやすい
2074	Pospisil, Leopold	Kapauku Papuan Economy	Human Relations Area Press	1972	撮影原本は覆刻版. Plates は ISO 100 のフィルムにも撮影. 原初版は、1963 年に Yale Univ. Press により出版
2075	Ross, Harold M.	Baegu: Social and Ecological Organization in Malaita, Solomon Islands	Univ. of Illinois Press	1973	Illinois Studies in Anthropology No. 8

2076	Salisbury, R.F.	From Stone to Steel: Economic Consequences of a Technological Change in New Guinea	Melbourne Univ. Press on behalf of ANU	1962	写真版ページのみ ISO 100 のネガフィルムに別に撮影。それは Text の末尾につなげてある
2077	Sexton, Lorraine	Mothers of Money, Daughters of Coffee: the <i>Wok Meri</i> Movement	UMI Research Press	1980	Studies in Cultural Anthropology No. 11
2078	Sillitoe, Paul	A Place against Time: Land and Environment in the Papua New Guinea Highlands	Harwood Academic Publishers	1996	
2079	Sillitoe, Paul et al.	Horticulture in Papua New Guinea	Univ. of Pittsburgh	2002	Ethnology Monographs of Dept. of Anthropology, Univ. of Pittsburgh No. 18. 部分撮影
2080	Siwatibau, Savenaca & Thompson, Graeme	Solomon Islands Economy: Achieving Sustainable Economic Development	AAID	1995	International Development Issues No. 37 by AAID
2081	Smith, Andrew J.	Federated States of Micronesia Marine Resources of Profiles	不明	1992	FFA Report No. 92/17
2082	Thaman, R.R. (ed.)	Food Production in the South Pacific	The Univ. of South Pacific	1976	The Record of R.W. Parkinson Memorial Lectures.
2083	Vargo, A. & Frentinos, L. (Compilers)	A Rapid Rural Appraisal of Taro Production Systems in Micronesia, Hawai'i and American Samoa	Univ. of Hawai'i	1989/90	Surveys conducted in conjunction with the project, "A Comparative Study of Low-input and High-input Taro Production Systems in the American Pacific, with Special Reference to Pest ...
2084	Vayda, P. Andrew (ed.)	Peoples and Cultures of the Pacific	The Natural History Press	1968	
2085	Waddell, Eric	The Mound Builders: Agricultural Practices, Environment, and Society in the Central Highlands of New Guinea	Univ. of Washington Press	1972	Monograph 53, the American Ethnological Society (ed. by Spencer, Robert F.)

2086	Ward, R. Gerard (ed.)	Man in the Pacific Islands: Essays on Geographical Change in the Pacific Islands	The Clarendon Press	1972	部分撮影 (撮影部分は、Introduction, Chapters 2, 3, 5, 9, & 10)
2087	Ward, R.G.	Plus ça Change ... Plantations, Tenants, Proletarians or Peasants in Fiji	ANU Press	1980	Of Time and Place (ed. by Jennings, J.N. & Linge, C.G.R.) という書籍の第7章
2088	Ward, R.G. & Proctor, A. (ed.)	South Pacific Agriculture Choices and Constraints: South Pacific Agricultural Survey 1979	Asian Developmental Bank	1980	
2089	Weiner, James F. (ed.)	Mountain Papuans: Historical and Comparative Perspectives from New Guinea Fringe Highland Societies	The Univ. of Michigan Press	1988	
2090	Winslow, John H. (ed.)	The Melanesian Environment	ANU Press	1977	Papers presented at and arising from the Ninth Waigani Seminar Port Moresby, 2-8 May 1975
2091	Yen, D.E.	The Sweet Potato and Oceania: an Essay in Ethnobotany	Bernice P. Bishop Museum	1974	Bernice P. Bishop Museum Bulletin 236
2092	Yen, D.E. & Gordon, Janet (eds.)	Anuta: A Polynesian Outlier in the Solomon Islands	同上	1973	
2093	Yen, D.E. & Mummary, J.M.J. (eds.)	Pacific Production Systems: Approaches to Economic Prehistory	ANU	1990	Papers from a Symposium at the XVth Pacific Science Congress
2094	Zerby, John & Tannous, Kathy	The Western Samoan Economy: Paving the Way for Sustainable Growth and Stability	AIDAB	1994	